ISSN 0919-7850

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.172

2007年9月

名古屋大学オープンキャンパス2007を開催

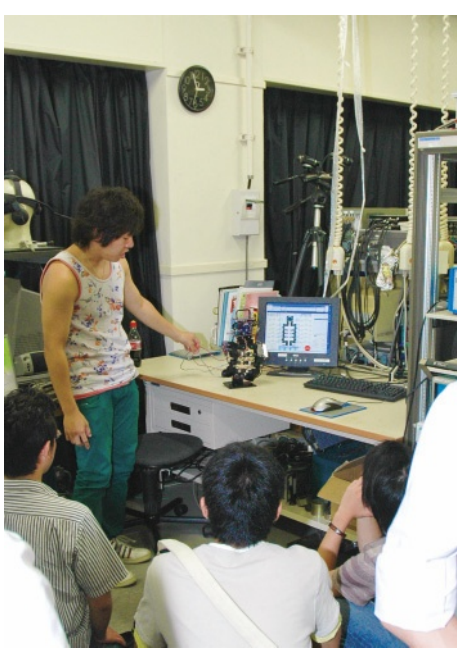
http://www.nagoya-u.ac.jp/

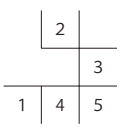
名大トピックス No. 172

目 次

●ニュース
名古屋大学オープンキャンパス2007を開催 3
第２回 AC21学生世界フォーラムを開催 4
「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」第１回諮問委員会を開催 5
飯島澄男名城大学教授を特別招へい教授として招致 5
豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長が改修工事中の豊田講堂を視察 6
藤木文部科学省官房審議官及び松永学術機関課研究調整官が本学を視察 6
東海テレビ放送株式会社と連携・協力に関する協定を締結 7
第４回名古屋大学マネジメントセミナーを実施 7
平成19年度教育著作権セミナーを開催 8
平成19年度 OJT 実施者研修を実施 8
第30回、31回防災アカデミーを開催 9
●地域にひらく
オープンカレッジ『自由奔放！サイエンス』 10
竹内　信仁（大学院経済学研究科教授）
●知の未来へ
母親と子どもへのサポートを考える 12
志澤　美保（医学部保健学科助教）
●学生の元気
「ロレアル－ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」を受賞して 13
三浦　陽子（大学院理学研究科物質理学専攻博士課程後期課程１年）
●部局ニュース
英文学会公開講座サマーセミナーを開催 14
特別講演会「黒い発展から緑の発展へ」を開催 14
「福井康雄先生の紫綬褒章受章を祝う集い」を開催 15
医学部臨床細胞治療学寄附講座開設記念式典及び講演会を開催 15
「細胞ジャングル探検ツアーで脳づくりのしくみを調べよう」を開催 16
「培養技術を使って体ができるしくみの謎にせまる」を開催 16
工学部がテクノフロンティアセミナー2007を開催 17
第５回モノづくり市民公開講座を開催 17
「からくりの世界へようこそ」を開催 18
地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第２回講演会を開催 18
第６回 Jr. サイエンス教室「遺伝子を見てみよう」を開催 18
国際開発・協力の仕事を目指す人のためのキャリアガイダンスを開催 19
第７回名古屋国際数学コンファレンスを開催 19
公開講座「健康開発のための運動基礎理論」を開催 20
市民公開講座「電気でファッショナブルライフ、あなたも今日から エコロジスト！」を開催 20
公開実験講座2007「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを 体験する」を開催 21
2007年度第３、４回オープンセミナーを開催 21
第11回企画展「地球は玉手箱－誕生石の魅力－」を開催 22
博物館にホタル石標本及び合成雲母試料が寄贈される 23
第26回オープンレクチャーを開催 23
●本学関係の新聞記事掲載一覧　平成19年７月16日～８月15日 24
●イベントカレンダー 27
●ちょっと名大史
G・C・アレン―日英のかけはしとなった外国人教師― 32

名古屋大学オープンキャンパス2007を開催





1、4、5　研究紹介の様子
2　学部紹介の様子
3　在学生との質疑応答

名古屋大学オープンキャンパス2007が、８月８日(水)から10日(金)の３日間にわたり開催されました。これは、高校２年生を中心とした大学進学希望者に対し、教育・研究における特色の紹介や施設見学等を通じて「名古屋大学で何が学べるか」を紹介し、今後の適切な進路を選択する上での目的意識を育成するため、毎年８月上旬に行っているものです。

今年度は、豊田講堂が改修工事で使用できないため、例年行っていた大学概要等の説明などの全体説明を取り止め、学部毎の説明会、施設見学等を行いました。

参加者は、オープンキャンパスの３日間を通して、昨年を上回る約7,000名（８日：経済学部744名、工学部1,692名　９日：教育学部385名、法学部811名、情報文化学部260名、農学部457名　10日：文学部763名、理学部568名、医学部医学科396名、医学部保健学科620名）であり、経済学部カンファレンスホール及びIB電子情報館大講義室を主な会場として、学部長をはじめ教職員・学生が一体となり、趣向を凝らした学部説明、模擬講義、施設見学等が行われました。参加した高校生らは、各会場で教員や在学生と直接懇談したり、自分の進路等について詳しく説明を聞き、熱心に質問やメモを取ったりしており、キャンパスは終日賑わっていました。

第２回 AC21学生世界フォーラムを開催

プレゼンテーション会場での記念撮影

第２回 AC21学生世界フォーラムが、７月22日（日）から29日（日）の間、フランス パリのポンゼショセ工科大学において開催されました。本フォーラムは２年に１度、AC21（国際学術コンソーシアム）参加大学において開催されるもので、第１回は2005年７月に本学で開催されました。

２回目となる今回は「持続可能な都市」をテーマとし、７カ国、11大学から16名が参加しました。本学からは高橋英里さん（文学部４年）、菅原春菜さん（理学部４年）、沢山　愛さん（工学部４年）の３名が、サイモン ウォリスAC21推進室副室長、林環境学研究科長とともに参加しました。

参加した学生は、まず、ポンゼショセ工科大学の研究室を訪問し、23日からは、同大のダヴィッド シュパン氏による、「都市における持続可能性とは何か」、「エネルギー」、「水と廃液」、「建築と住宅」と題する４つの講義を聴講し、同大図書館やインターネットを利用して、個別に学習を進めました。

25日には、林研究科長による特別講義「交通政策と持続可能性」が行われ、最終日の27日には、参加学生によるグループ別のプレゼンテーションが行われました。

参加した学生からは、「『持続可能な都市』というテーマについての理解を深められた」、「他国の同年代の学生と交流でき、有意義であった」、「言語や文化背景の異なる他国の参加者に自分の考えを伝えることの難しさを学んだ」、「異文化接触の場面では、自分が日本という国や文化を代表して話さなければならなくなることを実感した」等の感想が聞かれました。

詳しくは、AC21のホームページ（http://www.ac21.org/Portal）をご覧下さい。

研究室訪問の様子

林研究科長による特別講義の様子

「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」第１回諮問委員会を開催

先端融合領域イノベーション創出拠点の形成プログラム「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」プロジェクトの第１回諮問委員会が、７月31日(火)、工学研究科大会議室において開催されました。

本プロジェクトは、文部科学省の平成18年度科学技術振興調整費による同プログラムの新規課題として採択されたもので、平野総長を統括責任者とし、本学と協働企業４社（日本ガイシ株式会社、伊藤忠商事株式会社、富士通株式会社、オリンパス株式会社）が10～15年後のイノベーションを目指し、医工連携という先端融合領域で協働研究を行うものです。

諮問委員（左から、小笠原理事、加藤理事長、小畑学長、山本教授）

当日は、諮問委員として小笠原直毅奈良先端科学技術大学院大学理事、加藤延夫愛知医科大学理事長(元本学総長)、小畑秀文東京農工大学学長、山本　尚シカゴ大学教授（本学名誉教授）が出席した他、平野総長、杉浦理事、宮田副総長以下、大学院医学系及び工学研究科の関係者だけでなく、協働企業関係者、予防早期医療創成センターの若手研究員を含め、50名を超える研究者等が出席し、大規模な諮問委員会となりました。

委員会では、各プロジェクト担当者から進捗状況について説明の後、活発な質疑応答が行われ、各委員からは厳しい意見とともに、本プロジェクトへの期待が述べられました。

また、赤﨑記念研究館にある研究拠点である予防早期医療創成センターの視察も行われ、本プロジェクトの若手研究者が委員からの質問に対して、研究内容を懇切丁寧に説明する場面が見受けられました。最後に、総長から、本プロジェクトの成功に向けて邁進していく強い決意が述べられ、第１回諮問委員会は終了しました。

飯島澄男名城大学教授を特別招へい教授として招致

８月１日(水)、総長応接室において、飯島澄男名城大学大学院理工学研究科教授に対する特別招へい教授の委嘱状交付式が挙行されました。

今年４月に制定された特別招へい教授制度は、本学の教育・研究活動を一層推進するため、優れた業績を有する研究者を招致するもので、飯島教授への委嘱はその第１号となります。

委嘱状を交付し握手する平野総長（左）と飯島教授（右）

飯島教授は、カーボンナノチューブの発見者としてその名を世界に轟かせていますが、高分解能透過型電子顕微鏡法の世界最高峰のスペシャリストでもあり、世界のナノサイエンスとナノテクノロジーを日々牽引し続けています。現在のナノテクノロジーの隆盛は、1991年の飯島教授によるカーボンナノチューブの発見から始まったと言っても過言ではありません。

交付式後の懇談では、平野総長から、飯島教授のサイエンスに対する厳しくかつ真摯な姿勢と、ロマンを感じさせる研究スタイルにより、本学の若い学生や研究者に強い感銘を与えていただきたい、とのお話がありました。

世界的に著名な飯島教授に助言をいただくことで、本学のさらなる発展が期待されます。

豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長が改修工事中の豊田講堂を視察

豊田章一郎トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長（本学全学同窓会会長）が、７月20日(金)、本学を訪問し、改修工事中の豊田講堂を視察しました。

昨年12月に着工した同講堂の改修・増築工事は、トヨタ自動車(株)及びグループ企業９社の寄附により実現したプロジェクトで、平成20年２月の開館に向け、着々と工事が進められています。今回の視察は、同講堂外観デザインの大きな特徴でありプロジェクトの重要課題のひとつである「打ち放しコンクリートの復元」が佳境に入った時期に行われました。

講堂内での視察の様子

はじめに、豊田名誉会長は、計画概要についてパネルや模型による説明を受け、その後、外部改修工事の現場に出て、改修前後の柱の対比により打ち放しコンクリートの復元状況を確認しました。同会長は、仕上げ材料の耐用年数に強い関心を示すとともに、建物の維持管理の重要性に触れ、「リニューアルされる豊田講堂を末永く大切にしていくため、大学にも良好なメンテナンスをお願いしたい」と述べました。

続いて講堂内に入り、固定椅子の改修モックアップに着席し、座席の幅と間隔が今回の改修で大幅に改善されることを確認しました。さらに内装仕上げの実物見本を確認した後、最後に同講堂とシンポジオンとを一体化するホワイエの増築予定地で説明を受け、今回の視察は終了しました。

藤木文部科学省官房審議官及び松永学術機関課研究調整官が本学を視察

藤木完治文部科学省官房審議官（研究振興局担当）及び松永賢誕研究振興局学術機関課研究調整官が、７月31日(火)、本学を訪問し、学内の施設を視察しました。

まず、両氏は高橋事務局長から本学の概要及び教育研究活動の状況について説明を受け、続いて、山本理事を交えて、当面の諸課題等について意見交換を行いました。

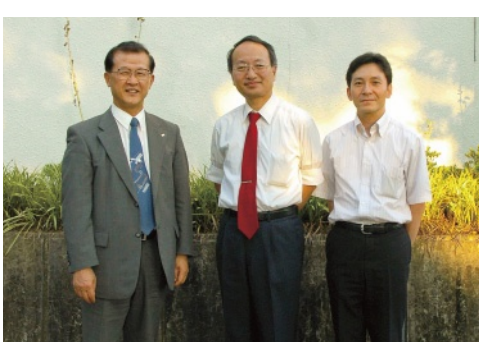
その後、山本理事の案内により、エコトピア科学研究所超高圧電子顕微鏡施設を訪れ、田中同施設長から、今年度から更新に着手する次の超高圧電子顕微鏡の数々の先進的な特長等の説明を受け、熱心に実験室内を視察しました。

次に、野依記念物質科学研究館を訪れ、野依特別教授のノーベル化学賞受賞を紹介するケミストリーギャラリーを見学するとともに、巽 物質科学国際研究センター長から、「物質合成研究拠点連携事業」及び「日独共同大学院プログラム」の進捗状況について説明を受けました。

続いて、大学院工学研究科附属プラズマナノ工学研究センターを訪れ、鈴置同センター長から、プラズマを用いたナノテクノロジー研究の状況、特に「プラズマナノ科学」の創成に向けた本学の意欲的な取り組みについて説明があり、活発な質疑が交わされました。

最後に、赤崎記念研究館を訪問し、赤崎特別教授の研究業績や青色発光ダイオードの研究開発史等を興味深く見学した後、平野総長と視察の感想を交えながら、忌憚のない意見交換を行いました。

超高圧電子顕微鏡の視察



左から、平野総長、藤木官房審議官、松永研究調整官

東海テレビ放送株式会社と連携・協力に関する協定を締結

７月27日（金）、本部１号館第２会議室において、平野総長、宮田副総長、浅野碩也東海テレビ放送株式会社代表取締役社長及び西尾賢治同専務取締役列席のもと、連携・協力に関する協定締結の調印式を挙行しました。

調印式では、平野総長及び浅野社長が、あいさつの後、協定書に調印しました。

本協定は、それぞれが有する人的・物的資源と知的財産を有効に活用して社会貢献することを目的に締結されたもので、そのうちのひとつが、今年10月と来年２月に開設される、教える技術や自己プレゼンテーション力、話力、コミュニケーション能力などのスキルアップの手法を伝授する「社会人講師養成講座」で、本学を会場とし、同社が運営を担当します。

現在の社会では、生涯学習など「学びのニーズ」が増大しています。多くの人々が何らかの「学びの場」に参加していると考えられ、特に団塊の世代が定年を迎え「学びの場」を求める人はますます増えるものと思われます。本学は、公開講座の開講や社会人学生の受け入れなど、地域の人々に対し教育の機会を提供してきましたが、一方で、社会人として培った知識や経験、技術を、公開講座や講演などで「教える」ことで社会に貢献したいと考えている人々も多く存在しています。本協定は、こうした要求に応えるものであり、また、連携及び講座開設によってできる人材ネットワークは、本学が開催する多様な社会連携事業でも活用できるものと思われ、その波及効果に対しても大いに期待されます。

あいさつする平野総長

調印後握手を交わす平野総長（左）と浅野社長（右）

第４回名古屋大学マネジメントセミナーを実施

第４回名古屋大学マネジメントセミナーが、７月23日（月）及び30日（月）の２日間、多元数理科学研究科棟509講義室及び野依記念学術交流館において開催されました。

このセミナーは、本学の役員、職員のさらなる意識改革と改革意欲の醸成、法人経営等に資する専門的知識の収集等を目的とするもので、今回は、福島一政大学行政管理学会会長（日本福祉大学常務理事･事務局長）を講師に迎え、大学改革を進める上で求められる職員のあり方をテーマに行われました。

セミナーの様子

23日は､｢大学経営機能の強化と職員業務の進化｣と題し、平野総長をはじめ、役員、部局長、事務系の幹部職員等合わせて86名が参加する中、福島氏から、これからの大学経営には､それを支えるプロフェッショナルな職員を育成し、大学の企画力を高めていくことが重要である、との力強いお話がありました。

30日は、新たな試みとして、事務系幹部職員を対象としたグループディスカッションが実施され、事務改善に関する３つのテーマについて、受講者各自が企画書を作成し、問題点や解決方法をディスカッションすることで問題解決能力の醸成を図りました。

２日間のセミナーを通じ、これからの大学経営に求められる職員の資質や戦略的プランニングに関する理解を深めることができ、大変有意義なものとなりました。

平成19年度教育著作権セミナーを開催

平成19年度教育著作権セミナーが、７月27日（金）、IB電子情報館大講義室において、独立行政法人メディア教育開発センターとの共催で開催されました。

本セミナーは、ICT（通信情報技術）活用教育を進める上で必要な著作権の基礎知識を修得するとともに、実践的な能力を身に付けることを目的としており、本学や愛知県内外の大学等の教職員、約80名が参加しました。

セミナーでは、尾崎史郎同センター教授（元文化庁著作権課マルチメディア著作権室長）が講師として、大学内で開発された教育用コンテンツの権利帰属のあり方や、試験問題での著作権のあり方等、大学の実情に合わせた分かりやすい講演を行いました。

講演後は、各大学等におけるICT活用教育の現状と今後の対応について活発な意見交換が行われました。

セミナー会場の様子

講演する尾崎教授

平成19年度 OJT 実施者研修を実施

平成19年度名古屋大学OJT（On the Job Training）実施者研修が、７月19日（木）、20日（金）の２日間にわたり、環境総合館レクチャーホールにおいて実施されました。

本研修は、各部局から推薦された掛長、専門職員を対象として行われ、部下に仕事を通じて必要な知識、技術、取り組み姿勢等を身に付けさせるための指導方法を養うことを目的として昨年度から実施しているもので、今回は33名が参加しました。

研修の様子

今回は、株式会社エ・ム・ズの浦野真奈美氏を講師に招き、コーチングを中心とした講義を行いました。

受講者にとっては、あまり経験のない参加型研修ということから、当初は緊張の面持ちでしたが、次第に打ち解け、積極的に現状の自己及び職場のコミュニケーションの取り方などについて、時には簡単なゲームをしながら意見交換を行いました。また、事前課題として収集した、「部下・上司からの声」を共有し、自分たちに対する期待を自覚するとともに、今後の各自のビジョンについて考え、承認し合いました。

この２日間で得たコミュニケーションスキルをもとに、受講者一人ひとりの今後の積極的な部下育成が期待されます。

第30回、31回防災アカデミーを開催

第30回防災アカデミーが、６月27日（水）、環境総合館レクチャーホールにおいて、災害対策室主催のもと開催されました。今回は、浅岡　顕工学研究科教授による「液状化の謎に迫る－地盤工学のアプローチ－」と題した講演が行われました。

伊勢湾周辺の埋立地をはじめ、濃尾平野には液状化による災害が懸念されている地域が広がっており、名古屋の周辺に住む人には、避けて通ることができない災害であるにも関わらず、液状化現象についてわかりやすい解説を聞く機会は少なかったため、今回の講演は待望されていました。講演では、まず、液状化現象を理解する上で欠かせない地盤力学の基礎が丁寧に説明されました。その後、豊富な事例を交えながら、液状化現象がもたらす被害等が紹介されました。

７月17日（火）には、第31回防災アカデミーが開催され、小林郁雄神戸山手大学教授による「復興まちづくりへの挑戦－阪神・淡路大震災の教訓－」と題する講演が行われました。

小林教授は自らが阪神・淡路大震災の被災者であり、神戸の復興まちづくりに積極的に関与してきました。講演では、被災直後と復興後に撮影された沢山の写真が紹介され、実例に基づいて復興プロセスを理解することができました。

講演する浅岡教授

第31回防災アカデミーの様子

オープンカレッジ『自由奔放！サイエンス』

竹内　信仁　大学院経済学研究科教授

経済学研究科では、毎年９月から翌年３月まで10回のシリーズでオープンカレッジ『自由奔放！サイエンス』を開催しています。既に今年で５年目に入り、常に150人以上の参加申込があり一般の人々の大学への関心の高さを感じています。

オープンカレッジは、もともと経済学研究科の数人の教員の雑談の中から生まれてきました。そこでの話は次のようなものでした。

今では死語となっていますが、大学は長い間「象牙の塔」と呼ばれ、社会からは切り離されたものとして、自らの望むままに研究・教育をすればよい場として考えられてきました。また､本来、長期的な視点から捉えられるべき大学の研究・教育が近視眼的に捉えられ、大学で行われる研究・教育は役に立たない、すぐには利益につながらないものと受け取られ、批判されてきました。その原因の一端は大学側にもありました。これまで大学は、社会から一線を画し、崇高な理論を展開することが大学の理想の姿と考える傾向があり、さらに大学自体でもその存在を改めて強調する必要もないといった傾向が顕著にあったように思われます。大学へ進学することが当然と考えられ、かつ入学希望者も定員の何倍もいるような社会の中で、その存在意義を敢えて示す必要もないと考えられてきました。

しかし、大学も社会の中の一組織であり、社会にその存在を認められなければ存続できず、認めてもらうには、その存在意義を社会にアピールしていかなければなりません。もし大学として、その研究・教育を長期的視点で捉えてほしいならそれなりの訴える努力を払う必要があります｡大学、特に公的な資金を使って運営される大学においては、特にその必要があり、その存在の説明責任を果たさなければなりません。

大学の存在を認めてもらうには、単に産学協同で協力し合っている企業だけではなく、企業も含めた一般市民に認めてもらう必要があります。企業には利潤目的があり、大学が利潤のために利用できるとなれば企業の方からアプローチしてきます。企業に大学の存在意義を認めてもらうことはそれほど困難なことではないように思われます。しかし中学生・高校生を含めた一般市民に、大学の存在意義を認めてもらうには、大学から積極的に情報を発信していく必要があります。市民がアプローチしてくるのを待つのではなく、大学から市民にアプローチする姿勢が求められています。さらに、大学で行われている研究・教育の内容を一般市民に理解してもらう必

昨年度の講義の様子

要がありますが、そのためには、自分たちだけが分かる言語で語るのではなく、一般市民に分かりやすい表現で説明していくことが必要です。ファラデーが「ろうそくの科学」を語り、サー・ロイ・ハロッドは「社会科学」について専門用語抜きに語る熱意が求められているといっています。

以上のような話の中から、経済学研究科の有志により「オープンカレッジ『自由奔放！サイエンス』」は立ち上げられました。そこでは、経済学研究科という部局だけにとらわれず、大学全体を対象とした報告会にしようと、出来るだけ多くの部局の人たちに応援を求めることにしました。また、講師の方たちには、専門用語を使わないで自らの研究を語ってもらいたいと要望しました。さらに、大学の敷居をできるだけ低くし、誰でも来られるように、参加無料とすることにしました。５年前に始めたときは、半年間にもわたる講座をどのようにPRしたらいいかもわからず、また果たして人が来てくれるかどうか大変心配しましたが、徐々に情報が広がっていき、毎回70～80人の人が出席し、講師に質問するなど活況を呈しております。

昨年度の講義の様子

今後も、出席者が一層増えて、名古屋大学の存在意義が地域の人々に認識され、地域の人々が名古屋大学の存在の支えとなってくれることを願ってオープンカレッジを続けていくつもりです。

2007年度オープンカレッジ日程（いずれも土曜日の10：00～12：00）

日時	テーマ	講師	
2007年			
９月８日	西洋美術における《受胎告知》	文学研究科	木 俣 元 一
９月29日	名古屋大学が進める先端医療開発	医学系研究科	水 野 正 明
10月20日	わかることと、できることとを、つなぐこと	情報科学研究科	齊 藤 洋 典
11月10日	宇宙を実感してみようーブラックホール候補天体	エコトピア科学研究所	田 原　　譲
12月１日	東南アジア熱帯林での林冠研究	生命農学研究科	中川弥智子
12月８日	教育改革の系譜をたどる	教育発達科学研究科	吉 川 卓 治
2008年			
１月12日	東アジアの地域統合とその制度化	経済学研究科	平 川　　均
２月16日	地球大気と環境問題	太陽地球環境研究所	松 見　　豊
３月１日	戦後目本における鉄鋼製造の技術革新	工学研究科	黒田光太郎
３月15日	江戸時代の法と裁判	法学研究科	神 保 文 夫

母親と子どもへのサポートを考える

志澤　美保　医学部保健学科助教

最近になって「食育」という言葉を聞いたことがある人が多いと思います。それは、「食」の問題が健康づくりの上で最も基本的で重要なものであるとの認識が定着し、関係・専門機関だけでなく国民全体で取り組むべき活動としてとりあげられるようになったからです。私はこの「食」に注目して研究を進めています。

母親が子ども（９ヶ月）に離乳食を与える様子を撮影したビデオ映像の一場面（まだ、子どもは母親から主に食べさてもらっている）

母親が子ども（14ヶ月）に離乳食を与える様子を撮影したビデオ映像の一場面（子どもは自分でも食べられるようになっている。やりとりを楽しんでいるのが二人の笑顔からわかる。）

私の専門は、看護学の中でも地域看護という分野です。看護というと、病気や障害を持っている方たちに関わることはよく知られていると思いますが、地域看護では健康な方たちを対象に、より健康を維持してもらうにはどうしたらいいのかを考え、援助していくのが専門です。その対象が母親と子どもの場合を母子保健といい、母親が育児を前向きに捉えられ、子どもが健やかに発達していけることを目指します。

「食べる」という行為は生きるために必要な基本的な行動ですが、食事の時間には文化的、社会的な要素も入っており、ヒトらしい特徴が現れる興味深い時間でもあります。特に子どもが小さい時は、母親は子どもに離乳食を食べさせてあげたり、自分で食べられるようになるまで食べ方を教えてあげたりと、とても重要な役割を担います。つまり、食事の時間は単に栄養をとるだけの時間ではなく、毎日行う親子のやりとりの時間でもあるということです。このため、多くの母親達は「食」に関連する問題に突き当たりやすく、悩んだり、落ち込んだりしています。私はこのような母親達を支えていく上で、どのような視点や助言が必要なのかを検討するため、研究協力者の家庭を訪問し、実際の食事をする場面を直接観察するという手法を用いて検討しています。アンケート用紙だけではなく、実際の場面を客観的に観察させてもらうことで、タイミングの合ったやりとりや、子どもの食への興味をどう引き出しているのかなどを明らかにし、相談現場でも役立つような知見を導き出すのが目的です。そしてこれからも、母親と子どもたちが健やかに暮らしていけるために必要な母子保健活動について、現場で活躍されている保健師、保育士、栄養士、心理相談員の皆さんたちと一緒に考えていくような研究をしていきたいと思っています。

学生の元気

「ロレアル－ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」を受賞して

大学院理学研究科物質理学専攻博士課程後期課程1年
三浦　陽子

授賞式の集合写真。右から５番目が筆者。

このたび私は「2007年度 第２回ロレアル－ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」をいただきました。この賞は化粧品会社ロレアルグループと国連専門機関ユネスコが共同で行う女性科学者の支援プロジェクトの一環で、若手女性科学者が国内の教育・研究機関で研究活動を継続できるよう支援することを目的として昨年創設されたものです。対象は物質科学、生命科学の分野で博士課程後期課程に在籍、または進学予定の40歳未満の女性科学者で、私は物質科学分野での受賞です。７月13日に東京で授賞式が行われ、賞状と奨学金をいただきました。

私は名大を卒業後９年間、愛知県の公立高校で物理の教員をしていましたが、もっと物理について理解したい、最先端の研究にも身を浸してみたいという欲求が高まり、大学院修学休業を取得して理学研究科物質理学専攻（物理系）の博士課程前期課程に入学しました。そのときは大学院での経験を高校生に伝えようと考えて入学しましたが、予想以上の研究の魅力に身も心も引き込まれ、とうとう退職してでも研究の世界でやってみたいと思うようになり、この春、退職して後期課程に進学しました。物質開発物理研究室に所属し、ハニカム（蜂の巣）格子を持つ物質の物性を研究しています。これまでの一番の研究成果はハニカム格子を持つルテニウム酸化物に新型の相転移を発見したことです。この物質は約267℃を境に磁性・電気伝導性が大きく変化します。中性子回折実験を行い詳しい結晶構造を調べた結果、高温ではハニカム構造がほぼ正六角形であったのが、低温では大きく歪んでいることが分かりました。このときルテニウムイオンは対をなし、その間に分子軌道ができると考えられます。このように温度変化により分子軌道が形成される相転移は今まで知られていなかったものです。この研究では構造変化を解明することが重要で、何度も解析を繰り返し、やっとそれが分かったときには本当に感動しました。このような感動をこれからも求め続けていきたいと思っています。年齢的にもハンディのある状況からのスタートですが、この賞を励みに、それを飛び越せるような力をつけ、道を切り開いていきたいと思います。

研究中の筆者。薬品を乳鉢ですりつぶしているところ。

みうら　ようこ
1973年生　愛知県出身
1996年名古屋大学理学部卒業後、愛知県の県立高校で理科教諭として勤務。2005年に大学院修学休業を取得し、大学院理学研究科博士課程前期課程に入学。この春、後期課程進学と同時に退職した。

英文学会公開講座サマーセミナーを開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、７月20日（金）、文学部会議室において、英文学会公開講座サマーセミナーを開催しました。本公開講座は、「加藤龍太郎英文学研究助成基金」学術研究等事業の研究助成により毎年実施しており、今年で20年目を迎えるものです。

今回は、楠　明子東京女子大学教授により、「Shakespeare 作品からみる Lady Mary Wroth － Love's Victorie を中心に」と題した講演が行われました。演題にある「レディ メアリ ロウス」という人物は、イギリスの名門家系シドニー家を出自としており、寡婦となってからも、シェイクスピアの作品である『ソネット集』に登場する美男の貴公子ウィリアム ハーバートとの間に、醜聞になることなく２人の婚外子をなした稀代の才女です。

講演の様子

講演で楠教授は、1621年に執筆されたにも関わらず、長い間シドニー家の文庫に仕舞い置かれ、1988年にようやく世に出たイギリス最初のパストラルコメディ、『恋の勝利』を取り上げ、同書の意義である「愛する自分自身が自分である」という「女性表象」を作り出して男性の権威の希薄化を図り、女性の置かれた不条理な境遇を摘出していたことに着目し、メアリ ロウスの女性表象について解説しました。

講演後に行われたフロアとの意見交換では、特に60歳代の参加者からの意見が多く寄せられ大変盛況でした。

特別講演会「黒い発展から緑の発展へ」を開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、７月20日（金）、経済学部第２講義室において、「黒い発展から緑の発展へ－中国の高度成長およびその環境への衝撃－」と題し、胡鞍鋼 清華大学教授による特別講演会を開催しました。

清華大学は、本学の学術交流協定校であり、また胡錦涛国家主席をはじめ多くの中国政府高官・研究者を輩出してきた名門大学で、胡教授は、中国における最高指導者のブレーンであり、第11次５ヵ年計画の作成にも携わった人物です。

講演する胡教授

胡教授は講演会において、経済成長、エネルギーの消費・構造・効率、汚染物の排出等の観点から中国と世界を比較した上で、中国の SO_2、CO_2の排出量はすでに世界１、２位になっていると指摘し、環境汚染型の「黒い発展」は世界に対する脅威・挑戦であると警告しました。また、中国がグリーン GDP 型の「緑の発展」に転換すべきであると主張し、「中国の成功は世界に発展のチャンスを与え、その失敗は世界を失敗に導く」と論じました。

学内外の関係者、研究者、学生をはじめ、一般の方々など約80人が参加し、講演後の質疑も活発に行われました。

今回の講演会は、同センターと清華大学公共管理学院との共同研究の一環として行われたもので、今後も学術・教育の連携をいっそう密にしていく予定です。

「福井康雄先生の紫綬褒章受章を祝う集い」を開催

福井康雄理学研究科教授が、長年の電波天文学における業績に対して平成19年春の紫綬褒章を受章したことを祝し、６月30日（土）、名古屋市内のホテルにおいて、「福井康雄先生の紫綬褒章受章を祝う集い」が執り行われました。

福井教授は、星間分子雲の広範囲にわたる観測的研究を推進してきました。「太陽程度の小質量星」の形成過程の解明に関する先駆的な業績を挙げるとともに、自ら考案した電波望遠鏡「なんてん」をチリ共和国に移設し、南半球で星間分子雲の観測を大規模に行い、国際的に高い評価を確立しました。

記念撮影

当日は、平野総長、松尾前総長ら来賓に加え、福井教授の研究を長年にわたって応援してきた「星の会」のメンバーら、約200名が参加しました。

まず、平野総長及び大島宏彦中日新聞社取締役最高顧問からの祝辞があり、続いて、松尾前総長から乾杯のあいさつがあった後、福井教授夫妻を囲んで２時間ほど歓談を行いました。会の途中では、観山正見国立天文台長、近藤理学研究科長からの祝辞、平田　文氏によるヴァイオリンの演奏があり、最後は、福井教授夫妻への花束贈呈、福井教授のあいさつをもって閉会となりました。

福井教授の受章を祝いたい、という出席者の気持ちのこもったあたたかな会になりました。

医学部臨床細胞治療学寄附講座開設記念式典及び講演会を開催

●医学部

医学部臨床細胞治療学寄附講座の開設記念式典及び講演会が、６月12日（火）、同学部附属病院中央診療棟３階講堂において行われました。

同寄附講座は今年４月１日に開設され、主にティッシュエンジニアリングを中心とした再生医療の研究開発・研究支援・臨床応用を行うもので、骨、皮膚、歯、毛髪、神経、関節、角膜、血管、消化管等の身体各臓器組織の再生プロジェクトを研究テーマとし、大学院医学系研究科臨床各講座と実用化を目指したトランスレーショナルリサーチを推進します。

感謝状を贈呈する杉浦理事（左）

式典では、各務秀明東京大学医科学研究所准教授の開会の辞、濵口医学部長の式辞、杉浦理事のあいさつに続き、寄附者を代表し浅香一郎株式会社毛髪クリニックリーブ21代表取締役、林　明男株式会社 TES ホールディングス代表取締役より祝辞が述べられました。続いて、上田　実、上田裕一両医学系研究科教授から同寄附講座開設の経緯について説明があり、成田裕司医学部同講座講師より新講座の抱負が述べられました。最後に、杉浦理事から、（株）毛髪クリニックリーブ21、（株）TES ホールディングス、日本メドトロニック（株）、日本ライフライン（株）、（社）半田市医師会健康管理センター、塩野義製薬（株）、ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）にそれぞれ感謝状と記念品が贈呈されました。

引き続き記念講演会が行われ、岡野栄之慶応義塾大学医学部教授による「幹細胞システムを用いた中枢神経系の再生医学」と題する講演が行われ、パーキンソン病に対する劇的な細胞治療や神経幹細胞の有効な誘導法など多岐にわたる魅力的な話に、聴衆は熱心に聞き入っていました。

「細胞ジャングル探検ツアーで脳づくりのしくみを調べよう」を開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、７月27日(金)、独立行政法人日本学術振興会による「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI」の一プログラムとして、「細胞ジャングル探検ツアーで脳づくりのしくみを調べよう」と題した研究室公開･体験学習を開催しました。

同プログラムは、科学研究費補助金による研究成果をわかりやすく発信することを通じて、小・中・高校生に対して学術と日常生活の関わりや、学術が持つ意味に対する理解を深める機会を提供することを目的としており、今回は、中学生13名、高校生７名の計20名が参加しました。

マウスを観察する参加者

まず、参加者は、事前に配布したパンフレットに記載した手順に従って、「リーラー」というミュータントマウスの歩行診断を行い、リーラーのふらつき歩き（失調性歩行）を観察しました。続いて、あらかじめ用意された正常なマウスの脳とリーラーマウスの脳とを見比べ、小脳のサイズの差を観察しました。さらに、各自が、両マウスの小脳の切片を作り、それを青い色素で染め、小脳の内部の様子を顕微鏡で観察し、神経細胞の並び方の違いを突き止めました。終了後は、自作の切片と撮影したカラーの顕微鏡写真を持ち帰りました。

参加者からは、「脳の働きには、その形がちゃんとできることが大切だとわかった」、「人間の病気にも関係しているとわかって驚いた」、「脳の中はほんとうにジャングルみたいだった」、「切片を作るのは難しかったけど楽しかった」、「将来、研究者になってみたい」などの感想が聞かれ、有意義な体験となりました。

「培養技術を使って体ができるしくみの謎にせまる」を開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、７月31日(火)及び８月２日(木)、独立行政法人科学技術振興機構による「地域科学技術理解増進活動推進事業」の一プログラムとして、「培養技術を使って体ができるしくみの謎にせまる」と題した研究室公開・体験学習を開催しました。小学生８名、中学生５名、高校生４名の計17名が、６グループに分かれ、２日間合計４時間のコースに参加しました。

顕微鏡で観察する参加者

初日は、事前に配布したパンフレットに記載した手順に従って、発生中のマウスから採取した心臓と脳の細胞・組織の培養を行い、培養器をアパートのように区切り、参加者各自が受け持つ細胞のありかを名札で示しました。双眼式の顕微鏡に戸惑いながらも、皆、懸命に観察していました。

２日目は、初日に培養した細胞がどのように変化したかを観察しました。参加した小学生からは、「すごい！動いてる！」、「のびたのびた！」などの歓声があがった他、「自分の中にもある細胞が本当に生きていることがわかった」、「命というものを感じました」などの感想もありました。

最後に、参加者に対し「細胞観察隊員証」が授与され、参加者は、各自で培養した細胞･組織が入ったプラスティック皿をアルコールで処理後に乾燥させたものと撮影した写真を持ち帰りました。

工学部がテクノフロンティアセミナー2007を開催

●工学部

工学部は、７月27日(金)、同学部電気電子・情報工学科の各実験室等において、「テクノフロンティアセミナー－触れてみよう、電子と情報の最先端に－」を開催しました。

このセミナーは、高校生を対象としており、電気電子・情報分野での最先端の研究を直接体験し、工学の面白さを理解してもらうことによって、近年の若年層の理工系離れを少しでも解消することを目的に、毎年この時期に開催しているもので、今年は、東海地方を中心に19の高等学校から30名の高校生が参加しました。

参加者は、６つの実験課題の中から選んだ課題について、同学科の教員や大学院学生のアドバイスのもと、試行錯誤を繰り返しながら熱心に取り組み、実験の成果によるデモンストレーションを行いました。教員や大学院学生との交流や大学施設の利用を通じて大学生活を実感するとともに、電子と情報の最先端技術に触れることで、工学への興味を一層深めたようでした。

実験風景

教員の説明を真剣に聞く参加者

第５回モノづくり市民公開講座を開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科創造工学センターは、８月３日(金)、９日(木)の２日間、IB電子情報館10階にある同センター内において、第５回モノづくり市民公開講座を開催しました。

同公開講座は、学生を対象とする「モノづくり講座」の一部を２年前から一般の方にも開放し、中・高校生が参加できるように夏休み期間にも実施しているもので、十代半ばの若い世代にモノづくりの楽しさ、難しさを知ってもらうとともに、一般の方にも本学に親しんでもらうことを目的としており、今回はこれまでの「メタルクラフトコース」に加えて、「電子回路工作コース」を新しく加えました。

「テルミン」制作の様子

３日は、「電子回路工作コース」として世界最古の電子楽器“テルミン”を製作しました。まず、技術職員が楽器に直接手を触れないで音を出すこの不思議な楽器の歴史と仕組みを解説し、曲を演奏した後、電子部品の講義がありました。その後、参加者のテーブル毎に技術職員がついて部品の組み立て方法、半田ごての操作方法を指導しました。慣れない作業に苦戦した参加者も多い中、終了までにはほとんどの参加者が完成させました。今回のテルミンは、安く簡単に作る必要性から音程のみが制御できる簡易版ですが、十分に演奏ができました。

９日は、メタルクラフトコースとして「金属モビール」を製作しました。参加者は自分で考えたデザインを基に、銅板を使って思い思いにオブジェを作りました。

中・高校生、保護者、さらに一般の方など、様々な年代の方から計22名の参加者があり、大変好評でした。

「からくりの世界へようこそ」を開催

●大学院工学研究科

角岡氏から説明を受ける来場者

大学院工学研究科創造工学センターは、８月７日(火)から９日(木)までの間、IB 電子情報館１階ロビーにおいて、「からくりの世界へようこそ」を開催しました。

会場では、機械の内部構造に施される工夫の面白さを題材にした展示や講演が行われ、2005年に行われた、学生自らが工夫した機能を競い合う「工作実習コンテスト」で作製された「B4サイズに収まる超小型組み立て式工作機械」の展示を行いました。学生がグループで対抗するコンテストのため、斬新なアイデアが随所に見受けられました。また、歯車、カム、リンクなどの機構部品が木で作られたユーモラスで奇抜な動きをする、からくりおもちゃが20点近く展示され、来場者が触って遊べるようになっていました。

また、特別展示として高浜市在住の角岡治郎氏の木工細工の作品群を展示するとともに、同氏が作品のからくりについて講演しました。期間中は、300名を超える来場者があり盛況でした。

地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第２回講演会を開催

●大学院生命農学研究科附属農場

講演する宗宮教授

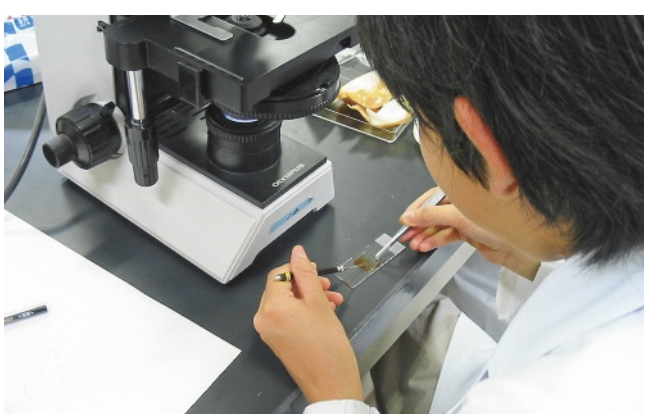
大学院生命農学研究科附属農場は、７月28日(土)、附属農場農業館において、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として行う講演会の第２回を開催しました。

「資源動物を知り、食といのちを考える」というテーマのもと、今回は、宗宮弘明生命農学研究科教授が「魚類に学び魚類との共生を考える」と題して、約５億年前に出現した魚類と200万年前に出現したヒトを比較しながら、魚類を学ぶことによってわかることを、ユーモアを交えて解説しました。昨年、重要な食糧資源でもある魚類が2050年までに枯渇するという予測がアメリカの科学雑誌「サイエンス」に発表されました。講演では、水産資源の乱獲に警鐘を鳴らすビデオも流し、魚類も含めた水産資源が世界規模で絶滅の危機にあることをわかりやすく紹介しました。

地域の方々を中心に30名を超える参加者があり、講演内容だけでなく、水産業や海の環境についての質問が数多く出され、食糧問題や環境問題への関心の高さがうかがえました。

第６回 Jr.サイエンス教室「遺伝子を見てみよう」を開催

●遺伝子実験施設



顕微鏡で観察する参加者

遺伝子実験施設は、７月21日(土)、名古屋市とその周辺に在住の小・中学生と保護者を対象に、第６回 Jr. サイエンス教室「遺伝子を見てみよう」を開催しました。

この教室は、子どもたちが DNA や細胞に触れる機会を作り、その中で科学する心や、遺伝学、バイオサイエンスなどに対する関心を育ててもらおうという趣旨で、毎年この時期に行われているもので、今年で６回目になります。今年も例年通り多数の参加希望がありましたが、抽選等で選ばれた小・中学生20名と保護者12名、合わせて32名が参加しました。

参加者は、遺伝や DNA に関する簡単な説明を受けた後、一人ひとりが、顕微鏡で植物の細胞核などを観察しました。続いて、２人１組となり、野菜のブロッコリーから実際に DNA を抽出しました。小一時間の作業の後、エタノールを注いだ試験管の中から実際に DNA の白い繊維が現れると、あちらこちらで歓声が上がりました。

最後に修了式が行われ、石浦同施設長より、一人ひとりに同教室の修了証書と記念品が手渡されました。

国際開発・協力の仕事を目指す人のためのキャリアガイダンスを開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、７月26日（木）、同研究科オーディトリアムにおいて、「国際開発・協力の仕事を目指す人のためのキャリアガイダンス」を開催しました。

同ガイダンスは、多くの同研究科大学院学生にとって目標である、国際協力・開発分野での仕事に携わるための心構えについて紹介するもので、年２回、同研究科と同研究科院生会が協同して企画し、毎年大好評を得ています。

今回は、「国際協力・開発分野で仕事をするには」というテーマのもと、大森功一世界銀行東京事務所広報担当官、森　真一有限会社アイエムジー代表取締役、松本　悟NGO メコンウォッチ代表の各講師が、国際協力・開発分野でのキャリアを志した動機、これまでのキャリア選択において重要としてきたポイント、国際協力・開発分野で活躍するために必要なスキル等について、参加者に対し、豊富な経験に基づきアドバイスをしました。キャリア形成過程での結婚やプライベートな時間の取り方等、人生の先輩でもある講師のライフヒストリーの話もあり、参加者は熱心に聞き入っていました。講演後は、３つのブースに分かれ、講師と参加者が自由に質疑応答をしました。

次回は、大学院学生が就職活動本番を迎える１月頃に、国際協力機構や民間企業、学校教諭を講師として、就職活動における具体的なアドバイスや仕事の内容等を紹介する予定です。

会場の様子

講師を囲み質問する参加者

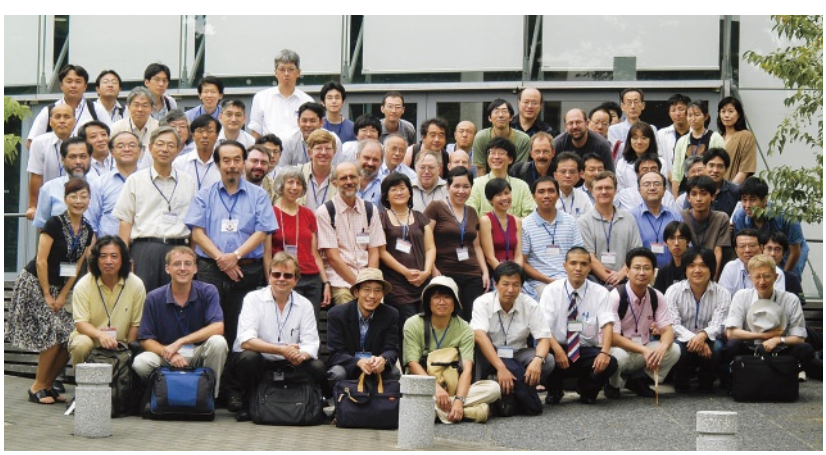
第７回名古屋国際数学コンファレンスを開催

●大学院多元数理科学研究科

大学院多元数理科学研究科は、８月６日（月）から10日（金）までの５日間、野依記念学術交流館において、国際会議「Spectral Analysis in Geometry and Number Theory」を開催しました。

この会議は、同研究科が平成13年度より様々なテーマで毎年開催している名古屋国際数学コンファレンスの７回目にあたり、スペクトル幾何学（ラプラス作用素のスペクトルと幾何学の関係を調べる分野）を主軸とする数学の諸分野における最新の研究成果の発表とともに、国内外の研究者の国際交流を目的として行われました。

会議には、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、オーストリア、イスラエル、フィリピンなど、国外からの講演者らおよそ20名を含め、約120名の研究者が参加しました。ミハイル シュービン ノースイースタン大学数学科教授による講演に始まり、最後のスティーブ ゼルディッチ ジョンズホプキンス大学数学科教授の講演に至るまで、ラプラス作用素の等スペクトル問題、ランダムウォークの幾何学的性質、力学系、ゼータ関数、固有関数の零点分布などの話題を中心に、日本人講演者14名、外国人講演者13名による熱気ある講演と、活気ある討議が繰り広げられました。



集合写真

公開講座「健康開発のための運動基礎理論」を開催

●総合保健体育科学センター

総合保健体育科学センターは、医学部保健学科の協力を得て、７月28日(土)、29日(日)の２日間、医学部保健学科第７講義室において、公開講座「健康開発のための運動基礎理論」を開催しました。

同講座は、健康づくりの第一線で働く医師、保健師、栄養士、健康運動指導士等の専門職業人を対象として、運動指導に役立つ最新の知識を身に付けてもらうことを目的として、平成５年度以降毎年開催しているものです。また、同講座は大学院授業の一部でもあり、一般受講者、大学院学生を含め約50名の受講者がありました。

講義は、梅村義久中京大学体育学部教授、横江清司財団法人スポーツ医科学研究所長、梶岡多恵子愛知学院大学心身科学部准教授及び同学科、同センター教員によるバラエティに富んだ内容で、受講者は真剣に耳を傾けていました。生活習慣病予防のための保健指導の中で、運動の重要性はますます高まっており、受講者からは来年度以降も是非継続して開催して欲しい、講義以外に実技研修の機会も設けて欲しい等の要望がありました。

横江所長による講義の様子

市民公開講座「電気でファッショナブルライフ、あなたも今日からエコロジスト！」を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所エネルギーシステム寄附研究部門は、８月６日(月)、ベンチャービジネスラボラトリーにおいて、市民公開講座「電気でファッショナブルライフ、あなたも今日からエコロジスト！」を開催しました。同公開講座は、環境と調和した持続可能な社会の実現のために、市民一人ひとりが電気への理解を深め、その大切さを知り、日常生活の場で電気を大切にする行いを実践するようになることを目的に、一般の方々を対象に、昨年度より開催しているものです。

３回目となる今回は、早川直樹工学研究科准教授より「超電導の時代はすぐ目の前に！」、吉光　司電力中央研究所知的財産センター上席より「電気の正体を探ろう」と題した講演が、それぞれ実験を交えながら行われました。

夏休み期間中の開催ということもあり、親子連れや小学生の参加が多数あり、講演終了後も実験や講演に関する質疑が活発に交わされ、好評を博しました。

講演終了後、活発に質問する参加者

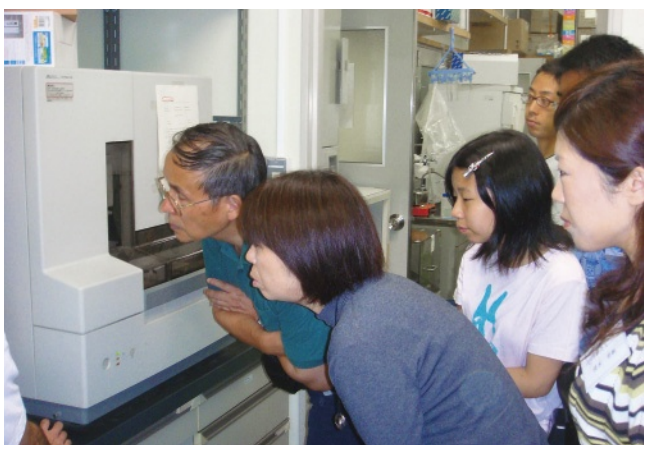
会場の様子

公開実験講座2007「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」を開催

●生物機能開発利用研究センター

生物機能開発利用研究センターは、８月４日(土)、５日(日)の２日間、公開実験講座2007「バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する」を開催しました。

今年の実験講座には、高校生、大学生及び社会人の計13名が参加し、「細胞の顔、糖鎖を見る」、「自分の遺伝子を見てみよう」、「コメの食味と DNA」と題したの３つのコースに分かれて実験に取り組みました。



DNA シーケンサーの動作に見入る参加者ら

参加者は、最初はおそるおそるだったマイクロピペットの操作も、講習の終わるころには慣れた手つきになり、実験の楽しさを味わっているようでした。生物の参考書を片手に、講座での体験を自分の学習に活かそうとしている高校生や、日頃から感じている生命科学に関する疑問を講師に投げかける社会人の方など、熱心な参加者が目立ちました。

終了後には、「遺伝子への理解を深めるということは、今後大事なことであると思う」、「本格的な実験が出来て面白かった」などの感想が聞かれ、好評のうちに２日間のコースが終了しました。

2007年度第３、４回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、７月12日(木)、第３回オープンセミナーを開催しました。

カンボジア王立農業大学農業研究普及部長であるメアス ソティ同センター客員研究員が、「カンボジア王立農業大学における獣医学のカリキュラムと研究開発」と題して、松本哲男同センター教授と共同研究した同大獣医学部における教育強化の成果を発表しました。カンボジアでは鳥インフルエンザ、口蹄疫等、家畜感染症の危険が高いにも関わらず獣医の育成ができていないことから、ソティ客員研究員は帰国後、獣医学部の強化に共同研究の成果を生かす予定です。続いて、ラシッド セラージ国際イネ研究所主任研究員が、「イネの耐乾性：国際イネ研究所での取り組み」と題して講演しました。米は世界で最も多くの人口を支える重要な食糧ですが、世界的な水不足がイネの生産性に大変深刻な影響を与えていることから、乾燥に強いイネの育成に関するこれまでの研究成果の概要と今後の研究方向について説明しました。

セミナーの様子

同月31日(火)には、第４回オープンセミナーを開催し、デオラ ナイバケラオ笹川アフリカ農業改良普及員教育基金事務局長が基金の概要について講演しました。同基金は農業改良普及員に大学で現場教育に基づく再教育を受けさせスキルアップを図る重要な事業で、学生に奨学金を出さず、教育コースを設置する大学への設備整備等の支援を行います。笹川アフリカ協会、大学院生命農学研究科及び情報文化学部から留学生の参加もあり、サハラ以南アフリカにおける技術普及の重要性について議論が深まりました。

第11回企画展「地球は玉手箱－誕生石の魅力－」を開催

●博物館

講演する大林氏

博物館は、４月10日(火)から７月21日(土)までの間、第11回名古屋大学博物館企画展「地球は玉手箱－誕生石の魅力－」を開催しました。期間中に5000名を超える入館者があり、鉱物関連の特別講演会が５回開催されました。

まず、４月27日(金)には、「シリカ鉱物から地球史を読む」、５月12日(土)には、「名古屋大学によるアフリカ大陸の地質調査研究、1962～2006」と題した講演が行われました（詳しくは、トピックス169号をご覧ください)。

６月２日(土)には、中津川市鉱物博物館の大林達生氏が「岐阜県苗木のペグマタイト鉱物」と題した講演を行い、ペグマタイト鉱物の産地として世界的に有名な岐阜県中津川市苗木産のトパーズ、緑柱石、黒水晶、カリ長石などの実物標本を見せながら、苗木産のペグマタイト鉱物の特徴と多様性をわかりやすく解説しました。

講演する松原氏

６月30日(土)には、日本で新鉱物を最も多く発見している国立科学博物館の松原　聡氏が、「新鉱物発見物語」と題し、松原氏が中心となって発見した約20の日本産の新鉱物について、発見の経緯、着眼点、苦労話、外国の研究者との競争など、興味深い講演を行いました。講演の中で松原氏は、「新鉱物の発見には、鉱物の色・形・共存鉱物などを注意深く観察して、何かちょっと違う、と思う直観力が一番大切である」と強調しました。参加者は、ここ数年の間に見つかった新鉱物や今年中に新鉱物と認定されるであろう鉱物に関する最新情報など、次から次へと繰り広げられる話に聞き入っていました。

坂野氏による鉱物鑑定会の様子

７月14日(土)には、産業技術総合研究所の坂野靖行氏が、鉱物のどこに注目してどのように観察するかを実演を交えて詳しく解説しました。講演後には、鉱物鑑定会が開かれ、約10名の熱心な鉱物愛好者が持参したお宝鉱物を坂野氏に鑑定してもらいました。坂野氏はそれぞれの人に、鉱物の産地や発見した経緯等を尋ねながら、ルーペで見たり、鉱物に紫外線を当てるなどいろいろな角度から鑑定を行いました。鑑定会は約１時間で終了しましたが、参加者からは、「こうした鑑定会を時々開いてほしい」、「鉱物の常設展スペースをもっと拡充してほしい」などの様々な声が聞かれました。

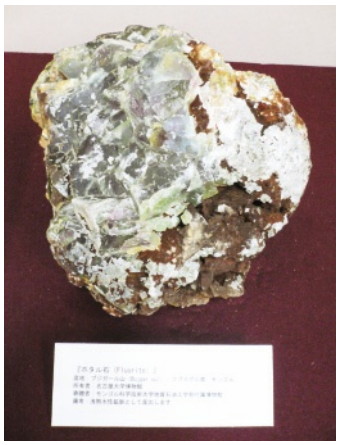
どの講演も鉱物愛好者を含む約50名の聴衆でいっぱいになり、講演後に活発な質疑応答が行われました。

博物館にホタル石標本及び合成雲母試料が寄贈される

●博物館

博物館は、６月22日（金）、モンゴル科学技術大学からホタル石の標本を寄贈されました。博物館では、2003年から同大地質石油工学部・層序古生物研究センターと共同研究を行っており、2006年には学術交流協定を締結しています。今回の寄贈は、両者の友好関係のますますの発展を祈念して行われたもので、同大からの寄贈書とともに、第11回博物館企画展「地球は玉手箱～誕生石の魅力～」の姉妹校標本コーナーで展示されました。ホタル石はモンゴルを代表する鉱物資源の一つであり、モンゴルは中国、メキシコ、南アフリカ共和国に次いで世界第４位のホタル石産出国です。

また、７月９日（月）には、故・野田稲吉本学名誉教授によって合成された金雲母の標本が、ご子息の野田正治氏より、文献集とともに寄贈されました。標本である「羽子板」状の金雲母の結晶（幅3cm、長さ6cm、厚さ2.5mm、重さ50グラム）は、取っ手にあたる細長い種子結晶から成長したもので、本学工学部で1940年頃から研究に着手した野田名誉教授が、1950年頃に日本で初めて実用可能なサイズの結晶として人工合成に成功した記念碑的なものです。野田名誉教授は、「合成雲母に関する研究」で、1957年に日本学士院賞を受賞しています。



寄贈されたホタル石

寄贈された合成金雲母

第26回オープンレクチャーを開催

●附属図書館

附属図書館研究開発室は、７月23日（月）、同館５階多目的室において、第26回オープンレクチャーを開催しました。

これは、同室が掲げる図書館のハイブリット化に関する研究開発及び学術情報流通を主なテーマとして、平成14年度から学内外の方を対象に開催しているもので、今回は、前田博子豊田工業高等専門学校建築学科講師による「公共図書館に流れる変化の風～日本と韓国の事例より～」と題した講演を行いました。

オープンレクチャーの様子

講演では、PFI 法（民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律）や指定管理者制度の導入により、日本の公共図書館が直面している管理運営に関する大きな変化が、日本で初めての NPO 図書館である高知こどもの図書館の事例等とともに紹介され、図書館への熱い思いを持った方々による新しい公共図書館のあり方について報告が行われました。また、韓国ソウルの公共図書館における、ここ20年間にわたる市立図書館の空間構成の変遷から、国内のみならず国を越えて公共図書館が大きな変化の時を迎えていることが対比的に紹介されました。

講演終了後は、理想の図書館像について、公共図書館・大学図書館の枠を越えて熱い議論が交わされました。 特に、実務を担っている図書館員の視点を交えた活発な質疑と意見交換が行われ、充実したレクチャーとなりました。

本学関係の新聞記事掲載一覧［平成19年７月16日～８月15日］

	記事	月日	新聞等名
1	培養技術を使って「体ができるしくみ」の謎にせまる７月31日、８月２日開催	7.16（月）	中日（朝刊）
2	テクノサイエンスセミナー～物理工学の世界を体験しよう～８月９日開催	7.16（月）	中日（朝刊）
3	時代に挑むフロンティア：愛知学院大学学長・小出忠孝氏・本学卒業生	7.16（月）	中日（朝刊）
4	村田学術振興財団の研究助成に川瀬晃道・エコトピア科学研究所教授が選定される	7.16（月）	日刊工業
5	教育学部附属高校生らが名古屋港水族館でシャチやイルカの飼育・訓練を見学	7.16（月）	中日（朝刊）
6	中越沖地震　鷺谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授は「ひずみの集中と、M7クラスの地震発生が深いつながりがあることを改めて裏付けられた」と指摘	7.17（火） 8.14（火）	読売 日経（朝刊）
7	中越沖地震　安藤雅孝･本学名誉教授は、「深夜だったらもっと犠牲者が出ていたのではないか」と推測　福和伸夫･環境学研究科教授は「大都市で起これば被害は数十倍の大規模なものになる。家屋の耐震化の必要性が改めて証明された」と話す	7.17（火）	中日（朝刊）
8	名大サロンの主役：伊藤由佳理・多元数理科学研究科講師　「特異点」解消で世は滑らか	7.17（火）	中日（朝刊）
9	野田稲吉・元本学工学部長が手掛けた合成雲母が博物館に寄贈される	7.17（火）	中日（朝刊）
10	書籍：「少女マンガにおけるホモセクシュアリティ」　山田田鶴子さん・本学卒業生著	7.17（火）	中日（朝刊）
11	活写！：「第四回アジア土木技術国際会議」　篠田陽介さん・本学学生	7.17（火）	中日（朝刊）
12	College mode：岡本美紀さん・本学学生：召しませ　名物・甘口スパ	7.17（火）	中日（朝刊）
13	暮らしを支える科学と技術展８月３、４日開催：本学・企業などの研究紹介	7.17（火）	中日（夕刊）
14	時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授　「般若心経」を読む	7.18（水）	中日（朝刊）
15	本学　学内メール流出	7.19（木）	中日（朝刊） 朝日（朝刊） 毎日（朝刊） 日経（朝刊） 読売
16	附属病院医療事故　医療事故調査委員会は「人為的なミスの連鎖が原因」と発表	7.19（木）	中日（夕刊） 日経（朝刊） 朝日（朝刊） 毎日（朝刊） 読売
17	「第40回医学研究助成」に丹羽康正・医学部附属病院講師が採択される	7.20（金）	毎日（朝刊）
18	三浦陽子さん・本学大学院生が「ロレアル・ユネスコ女性科学者　日本奨励賞」を授賞	7.20（金） 7.24（火） 7.26（木）	日刊工業 中日（夕刊） 中日（朝刊）
19	中越沖地震　鈴木康弘・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授は「今回の震源付近は日本で最も調査の進んだ海域と言える。探査技術が原因で震源活断層が見つからなかったのであれば、活断層調査に限界があることになる」と話す	7.20（金）	朝日（朝刊）
20	伸びる変わるＲ＆Ｄ：産学連携の取り組みとして本学３件掲載	7.20（金）	日刊工業
21	第89回全国高校野球選手権愛知大会：教育学部附属高校出場	7.20（金）	読売
22	中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授　参院選の本質的な争点	7.22（日）	中日（朝刊）
23	中越沖地震　木村玲欧・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教は避難所生活について、「行政や避難所運営者は、プライバシーなどのニーズをくみ上げる努力を継続し、災害関連死を防いで欲しい」と話す	7.22（日）	読売
24	新潟県長岡市の高齢者総合ケアセンターこぶし園　総合施設長・小山剛氏が、医学部附属病院で大災害への備えを訴える	7.22（日）	朝日（朝刊）
25	「犬山の教育改革～学力テストをめぐって」８月４、５日開催：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授	7.22（日）	朝日（朝刊）
26	観光ルートバス「メーグル」出発式21日開催：奥野信宏・元本学副総長	7.22（日）	中日（朝刊）
27	こころの一作：杉山範子さん・本学大学院生　絵本「しずくのぼうけん」	7.22（日）	中日（朝刊）
28	序二段の舛名大・本学卒業生　負け越し	7.22（日）	中日（朝刊） 朝日（朝刊）
29	中越沖地震　飛田潤・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授は「耐震基準強化以前に造られた、屋根が重く壁の弱い古い木造住宅に被害が多い。住宅の耐震化の重要性を改めて示された」と話す	7.23（月）	中日（朝刊）
30	参院選立候補者に「政治とカネ」をテーマにアンケート実施　小野耕二・法学研究科教授は、「約半数が『国会議員の自浄能力』に不安を感じているのは嘆かわしい状況」と指摘	7.23（月）	中日（朝刊）
31	書籍：「浜口雄幸　たとえ身命失うとも」　川田稔・環境学研究科教授著	7.24（火）	中日（朝刊）

本学関係の新聞記事掲載一覧［平成19年７月16日～８月15日］

	記事	月日	新聞等名
32	訃報：小川利夫・本学名誉教授	7.24（火）	中日（朝刊） 毎日（朝刊） 朝日（朝刊） 読売
33	第５回中央日本流・連携サミット23日開催：松尾稔・元本学総長、奥野信宏・元本学副総長	7.24（火） 8. 2（木）	中日（朝刊）
34	顔：豊川高等学校教諭・宮本延春氏・本学卒業生	7.24（火）	読売
35	時日記：「主夫学生奮闘編」の高田浩史氏・本学卒業生が「家族いっしょにいる幸せ」を出版	7.24（火）	中日（朝刊）
36	本学と全国７大学のスーパーコンピューターを民間企業に無料開放	7.25（水）	朝日（朝刊） 日刊工業
37	林　光佑・元本学理事が名古屋市人事委員会の委員長に選出される	7.25（水）	中日（朝刊）
38	叙位叙勲：従四位瑞宝中綬章　石黒一三・本学名誉教授	7.26（木）	中日（朝刊）
39	中越沖地震　鷺谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授は2001年に、ひずみ集中帯の存在を公表し「この地域で大地震が頻発する傾向がある」と報告	7.26（木）	日経（夕刊）
40	瓜谷章・工学研究科教授は４月に柔道部の部長に就任　入部希望の受験生や子どもたちに柔道部の魅力を伝える	7.26（木）	中日（夕刊）
41	東海地方６月の地震：林　能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	7.27（金）	読売
42	先端医療ネットワークセミナー８月２日開催	7.27（金） 7.31（火）	中日（朝刊） 日経（夕刊）
43	小野耕二・法科大学院教授のゼミで行った政治意識調査の結果、法学部生の72% が憲法改正に反対	7.27（金）	朝日（朝刊）
44	盤樹の森：碁・将棋の大学日本一を決める大会28日から開催	7.27（金）	毎日（朝刊）
45	山本保氏・本学卒業生　参院選に立候補	7.27（金）	中日（朝刊）
46	大幸財団は、平成19年度の学術研究助成に上野宜久・理学研究科助教、古川鋼一・医学系研究科教授、大槻主税・工学研究科教授、林　良敬・環境医学研究所准教授などの研究7件が選出される	7.28（土）	中日（朝刊）
47	本学学生を中心とする薬害肝炎名古屋訴訟の支援グループ「YELL（エール）」のメンバーと原告らは、傍聴を呼びかけるチラシを配布	7.28（土）	読売
48	「20世紀美術の森」愛知県美術館で開催：同館学芸員や本学学生らの案内で、県内から参加した小学生が、「森の探検マップ」を手に館内を見学	7.28（土）	中日（朝刊）
49	「愛・知・みらいフォーラム」設立総会28日開催：愛知医科大学理事長・加藤延夫・元本学総長	7.29（日）	中日（朝刊）
50	古滝雅和さん・本学大学院生　三重県南伊勢沖で水死	7.29（日）	中日（朝刊） 朝日（朝刊） 読売
51	識者の声：小野耕二・法学研究科教授は「愛知選挙区はもともと民主の基盤が強い。２人の候補を立て、戦う姿勢を示した戦略が効を奏した」と話す	7.30（月）	読売
52	本学　東海テレビと連携・協力協定を締結　今秋から一般社会人を対象に、社会人講師を養成する講座を開始　平野眞一総長は、「学びの場を求める希望だけでなく、教える側で貢献したい人も増えており、ニーズに応えるものだ」と話す	7.31（火）	中日（朝刊）
53	「夏休み親子体験ツアー　都会で鉱物・化石を探そう！」開催	7.31（火）	中日（朝刊）
54	時日記：小林さやかさん・本学学生　最終面接の案内に“ヒャッホー♪”	7.31（火）	中日（朝刊）
55	人に技：共立総合研究所・江口忍氏・本学卒業生　ユニークな視点で話題の経済リポート	7.31（火）	日経（朝刊）
56	中越沖地震　田所敬一・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授、木村玲欧・同センター助教、林能成・同センター助教、安藤雅孝・本学名誉教授が地震を分析	8. 1（水）	中日（朝刊）
57	本学　飯島澄男・名城大学教授を特別招聘教授に任命	8. 1（水） 8. 2（木） 8. 3（金）	朝日（夕刊） 中日（朝刊） 日刊工業
58	本学、産業技術総合研究所、東北大学の研究グループは、ごく微量の溶液を出すことのできる「極小ピペット（スポイト）」を開発	8. 2（木）	毎日（朝刊）
59	化学イノベーションシンポジウム４日開催	8. 2（木）	中日（朝刊）
60	文化：原爆投下　春名幹男・国際言語文化研究科教授	8. 2（木）	中日（夕刊）
61	入門講座：近世の怪談　千葉大学名誉教授・服部幸雄氏・本学卒業生	8. 2（木）	日経（夕刊）
62	朝日カルチャーセンター「量子論講座」９月15日から開催：北門新作・本学名誉教授	8. 3（金）	朝日（夕刊）

本学関係の新聞記事掲載一覧［平成19年７月16日～８月15日］

	記事	月日	新聞等名
63	経済学部で省エネ対策に取り組み光熱水料は対策前の３割に削減　荒山裕行・経済学部長は「学生に生きた経済学を学んでもらっている」と話す	8. 4（土）	朝日（夕刊）
64	中部を彩る：豊川高等学校教諭・宮本延春氏・本学卒業生　生徒の声とことん聞く	8. 4（土）	日経（夕刊）
65	叙位叙勲：従四位瑞宝中綬章　深野泰茂・本学名誉教授	8. 4（土）	中日（朝刊） 読売
66	中越沖地震　鷺谷威・環境学研究科准教授　４つのプレートがひずみ生む	8. 5（日）	日経（朝刊）
67	ビジネス交差点：デンソー相談役・岡部弘氏・本学卒業生　伝統の「ものづくり」にエールを	8. 5（日）	朝日（朝刊）
68	NTT 西日本社長・森下俊三氏・本学卒業生が「組み込みソフト産業推進会議」の副会長に就任	8. 6（月）	日刊工業
69	研究室発：上田実・医学系研究科教授　インプラントのリスク軽減	8. 7（火）	中日（朝刊）
70	宮本元議長党葬：後　房雄・法学研究科教授は「今度の衆院選が共産党の最後のチャンス　妥協して野党共闘に入る方針転換を」と話す	8. 7（火）	朝日（朝刊）
71	書籍：「黄砂の科学」　甲斐健次・環境学研究科教授著	8. 7（火）	中日（朝刊）
72	「機械の日・機械週間」関連行事７月25日～27日開催：マイクロ２足歩行ロボットの政策と制御	8. 7（火）	日刊工業
73	本学の医療技術を導入　国内初の再生医療実用化に向け挑戦	8. 7（火）	日経（朝刊）
74	College mode：高木賢治さん・本学大学院生　丁寧な説明に興味わく「恐竜大陸」展	8. 7（火）	中日（朝刊）
75	中部の教育：高等教育研究センターの「ティップス先生からの７つの提案」シリーズ	8. 8（水）	読売
76	名古屋大学公開講座「豊かな生活のために」21日から10月９日まで開催	8. 8（水）	毎日（朝刊）
77	福田敏男・工学研究科教授の研究室とディー・ディー・エス、美和ロックが産学連携で、防犯・防災に役立つ次世代ドアロックセキュリティーシステムの開発に着手	8. 9（木）	中日（朝刊）
78	中越沖地震　飛田潤･環境学研究科附属地震火山･防災研究センター准教授は、「古い木造住宅には耐震改修が必要」と話す	8. 9（木）	中日（朝刊）
79	「ロボットビジネスフォーラム in グレーター･ナゴヤ」９月11、12日開催：本学と大企業、地域の中小企業のロボット製品や技術を展示	8. 9（木）	日刊工業
80	小保方潤一・遺伝子実験施設准教授と山本義治・遺伝子実験施設研究員らの研究グループは、イネにおいて全遺伝子のスイッチ機能を果たすプロモーターの全容を解明し、データベース化を完成	8.10（金）	中日（朝刊） 日刊工業 読売
81	風向計：家森信善・経済学研究科教授　企業育てる投資ファンドへ	8.10（金）	読売
82	東海地方　７月の地震：林　能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	8.10（金）	読売
83	山田健太郎・環境学研究科教授は、６月に破断の見つかった木曽川大橋も崩落した米ミネアポリスの橋同様、「あと1週間放置していたら、回復不可能な変形や落橋につながる恐れもあった」と話す	8.10（金）	朝日（朝刊）
84	テクノ・フェア名大2007　９月７日開催	8.10（金）	日刊工業
85	ライフトピア・シンポジウム「高齢期の生活習慣病」19日と９月２日開催	8.10（金） 8.14（火）	中日（朝刊） 朝日（朝刊）
86	全国の国立大学　来春の入試要項発表	8.10（金）	中日（朝刊）
87	岡崎市ごみ処理施設建設技術検討委員会の委員長・伊藤秀章・本学名誉教授が、同市の一方的な検討委員会廃止を批判	8.10（金）	中日（夕刊）
88	本学、大阪大学、京都大学の研究チームは、爆薬に反応する地雷探知センサーの開発に成功	8.11（土）	朝日（朝刊）
89	本学　米ノースカロライナ州に開設予定の産学官連携拠点「ノースカロライナ事務所」の現地法人化を検討	8.11（土）	日刊工業
90	情報科学研究科博士課程入試で出題ミス	8.11（土）	読売 毎日（朝刊） 日経（朝刊） 朝日（朝刊）
91	中部を彩る：戦争と平和の資料館　ピースあいち館長・野間美喜子氏・本学卒業生　「これが戦争」未来へリレー	8.11（土）	日経（夕刊）
92	市民学習会「名古屋哲学セミナー」11日開催：沢田昭二・本学名誉教授	8.12（日）	中日（朝刊）
93	名大サロンの主役：鮎京正訓・法学研究科教授　法整備支援　友好の礎に	8.14（火）	中日（朝刊）
94	太陽地球環境研究所の敷地内にある豊川海軍工廠を小学生を含む男女50人が見学	8.14（火）	日経（夕刊）
95	日本数学コンクール12日開催	8.14（火）	中日（朝刊）

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容

8月1日(水)～9月29日(土)
場　　所：博物館展示室
時　　間：10時00分～16時00分
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

［問い合わせ先］
博物館事務室　052-789-5767

第12回博物館企画展
「ふしぎふしぎミクロの美術館
～電子顕微鏡で見るいきものの世界～」

9月19日(水)
場　　所：中央図書館５階多目的室
時　　間：18時00分～19時30分

［問い合わせ先］
附属図書館友の会事務局
052-789-3666

附属図書館友の会トークサロン
第９回ふみよむゆふべ

講演題目：「浮世絵を読む」
講 演 者：勝原良太（浮世絵研究家）

9月22日(土)
場　　所：生命農学研究科附属農場
　　「農業館」
時　　間：14時00分～16時00分
定　　員：60名
入 場 料：無料

［問い合わせ先］
生命農学研究科附属農場　0561-37-0210

地域貢献特別支援事業
「都市近郊の農業教育公園・講演会」

テ ー マ：「資源動物を知り、食といのちを考える」
講演題目：「家畜から学ぶ親子の絆」
講 演 者：大蔵　聡（生命農学研究科准教授）

9月25日(火)
場　　所：野依記念学術交流館１階会議室
時　　間：17時00分～19時00分
入 場 料：無料

［問い合わせ先］
研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051、6153

第17回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：多和田眞（高等研究院教員）
講演者Ⅱ：奥地拓生（高等研究院教員）

9月25日(火)
時　　間：15時30分～17時00分
場　　所：生命農学研究科Ａ棟334号室

［問い合わせ先］
農学国際教育協力研究センター
杉本充邦准教授　052-789-4599

2007年度 ICCAE 第６回オープンセミナー

テ ー マ：東南部アフリカ各国のネリカの状況について
講 演 者：坪井達史氏（JICA ウガンダ農業専門家）

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
9月25日（火）、26日（水） 場　　所：工学部１号館 共　　催：愛知県立大学情報科学部、 静岡大学情報学部 ［問い合わせ先］ ワークショップ実行委員会 阿草清滋委員長　052-789-3302	**情報学ワークショップ2007**
9月26日（水） 場　　所：野依記念学術交流館 時　　間：10時30分～12時00分 ［問い合わせ先］ 学務部学務企画課　052-789-2159	**留学生特別コース学位授与式**
9月26日（水） 場　　所：博物館野外観察園 時　　間：10時30分～12時00分 参 加 費：無料 ［問い合わせ先］ 博物館事務室　052-789-5767	**博物館野外観察園見学会** 案　　内：西田佐知子（博物館助教）
9月27日（木）、10月２日（火）、 10月10日（水） 9/27　場　　所：博物館講義室 　　時　　間：14時00分～15時30分 10/2　場　　所：博物館展示室 　　時　　間：14時00分～15時00分 10/10 場　　所：博物館講義室 　　時　　間：15時00分～17時30分 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 博物館事務室　052-789-5767	**第78回、第79回、第80回博物館特別講演会** 第78回（9/27） 講演題目：「食と健康～電子顕微鏡で診る～」 講 演 者：宮澤七朗（医学生物学電子顕微鏡技術学会 名誉理事長） 第79回（10/2） 講演題目：「科学者の見たアフリカの大地と人」 講 演 者：諏訪兼位（本学名誉教授） 第80回（10/10） 講演題目：「愛知における西洋医学のあけぼの ～愛知医学校・愛知病院設立130周年記念碑完成によせて～」 講 演 者：塩野谷恵彦（本学名誉教授）、高橋　昭（本学名誉教授）、 羽賀祥二 (文学研究科教授)、西川輝昭 (博物館教授)
9月29日（土）、10月20日（土） 場　　所：経済学研究科 カンファレンスホール 時　　間：10時00分～12時00分 ［問い合わせ先］ 経済学研究科 エクステンション・サービス ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp	**名古屋大学オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」** ９月29日 講演題目：「名古屋大学が進める先端医療開発」 講 演 者：水野正明（医学系研究科助教） 10月20日 講演題目：「わかることと、できることとを、つなぐこと」 講 演 者：齊藤洋典（情報科学研究科教授）
10月１日（月）～19日（金） 場　　所：中央図書館４階展示室 時　　間：９時30分～17時00分 （土日祝とも） ［問い合わせ先］ 附属図書館庶務掛　052-789-3667	**附属図書館2007年秋季特別展** **「『遊心（ゆうしん）』の祝福** **―中国文学者・青木正兒（まさる）の世界―」**

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
10月２日（火）～13日（土） 場　　所：博物館展示室 時　　間：10時00分～16時00分 休 館 日：日・月曜日 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 博物館事務室　052-789-5767	**第13回博物館企画展** **「諏訪兼位　アフリカの旅　スケッチと短歌」**
10月５日（金） 場　　所：情報連携基盤センター４階 演習室 時　　間：13時00分～17時55分 ［問い合わせ先］ 情報連携基盤センター庶務掛 052-789-4352	**第４回東海地区 CSI 事業報告会** 内　　容：「ネットワークとセキュリティ」
10月９日（火） 場　　所：文系総合館７階 カンファレンスホール ［問い合わせ先］ 研究協力・国際部国際課 留学生センター掛　052-789-5951	**日本語研修生及び日本語・日本文化研修生開講式**
10月10日（水） 場　　所：野依記念学術交流館 時　　間：16時30分～18時00分 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 物質科学国際研究センター 高木秀夫准教授　052-789-5473	**化学系セミナー** 講演題目：「キラル高分子の合成・構造・機能」 講 演 者：岡本佳男（エコトピア科学研究所客員教授）
10月12日（金） 場　　所：博物館展示室 時　　間：14時00分～15時00分 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 博物館事務室　052-789-5767	**第21回博物館コンサート（NUMCo）** テ ー マ：「和と洋の融合 －East Meets West－」 演　　目：春の海、アメージング・グレース、竹田の子守歌　他
10月13日（土） 場　　所：文系総合館７階 カンファレンスホール 時　　間：14時00分～17時00分 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 国際言語文化研究科 鈴木繁夫教授　052-789-4791	**国際言語文化研究科** **アクション・フォーラム** 内　　容：①基調講演及び ②名誉修了生発表会 講 演 者：①金平茂紀氏（TBS 報道局長） ②李　澤熊（留学生センター准教授）、 ロナルド・ジェフリー・スチュワート（県立広島大学講師）、他２名
10月13日（土） 場　　所：中央図書館５階多目的室 時　　間：13時00分～16時00分 ［問い合わせ先］ 附属図書館庶務掛　052-789-3667	**附属図書館2007年秋季特別展講演会** 講演題目：「陶然自楽として－ジャーナリストの目に映った青木正兒－」 講 演 者：永澄憲史氏（京都新聞南丹支局長） 講演題目：「好むことと知ること－青木正兒の学問－」 講 演 者：井上　進（文学研究科教授）

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
10月17日（水） 場　　所：野依記念物質科学研究館 時　　間：10時30分～12時00分 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 理学研究科物質理学専攻 小谷　明准教授　052-789-2954	**社会と科学** 講演題目：「国際交流」 講 演 者：嶋田　勉氏（松下電器産業株式会社パナソニックスカラシップ社社長）
10月19日（金） 場　　所：政策研究大学院大学 時　　間：15時00分～ ［問い合わせ先］ 総務部総務課　052-789-2009	**第５回名古屋大学東京フォーラム** テ ー マ：「アジアに繋ぐ知の架け橋～飛翔するアジア諸国への法整備支援～」 内　　容：名古屋大学は、「ことつくり」（卓越した研究成果）と「ひとつくり」（勇気ある知識人の養成）を通して地域や産業の発展に貢献するとともに、世界とりわけアジア諸国との学術交流を推進し、成果を積み重ねてきました。この成果を広く国内外に積極的に、また、タイムリーに発信するため平成15年から東京地区において本フォーラムを開催しています。５回目となる今回は、名古屋大学学術憲章に基づき実施・進行している日本とアジア諸国との新しい関係を築き上げるための様々な先駆的事業のうち、「アジア法整備支援プロジェクト」「日本法令外国語訳プロジェクト」を取り上げ、日本司法の国際化をめぐる動向などを中心に、アジアにおける本学の取り組みを紹介します。
10月20日（土）、21日（日） 場　　所：博物館講義室 時　　間：13時00分～17時00分（10/20） ９時00分～16時00分（10/21） 定　　員：30名 対　　象：小学３年生～中学３年生と その保護者 ［問い合わせ先］ 博物館事務室　052-789-5767	**第３回地球教室（親子対象フィールドセミナー）**
10月27日（土） 場　　所：生命農学研究科附属農場 「農業館」 時　　間：14時00分～16時00分 定　　員：60名 入 場 料：無料 ［問い合わせ先］ 生命農学研究科附属農場 0561-37-0210	**地域貢献特別支援事業** **「都市近郊の農業教育公園・講演会」** テ ー マ：「資源動物を知り、食といのちを考える」 講演題目：「黄身の中身と白身の中身」 講 演 者：村井篤嗣（生命農学研究科准教授）
11月３日（土） 場　　所：IB 電子情報館大講義室、 名古屋国際ホテル 時　　間：10時30分～19時00分 ［問い合わせ先］ 文系事務部総務課総務グループ （文学部担当）　052-789-2202	**文学部創立60周年記念学術講演会・シンポジウム及び記念式典** 内　　容：学術講演会、学術シンポジウム、記念式典及び祝賀会

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等　　内容

11月３日（土）
場　　所：名鉄百貨店ヤング館６階
　　マザームーンカフェ名古屋
時　　間：10時15分～（90分程度）
定　　員：30名（要事前申込み）
参 加 費：無料

［問い合わせ先］
理学研究科篠原研究室
052-789-5188

サイエンスカフェ

講演題目：「小さい、軽い、丈夫
　　ー産業界が注目する夢の新奇炭素物質ナノカーボン」
講 演 者：篠原久典（理学研究科教授）、齋藤理一郎（東北大学教授）

11月３日（土）、12月22日（土）、
１月12日（土）、２月２日（土）
場　　所：医学部医学教育研究
　　支援センター超微形態室
時　　間：13時00分～16時00分
定　　員：10名
対　　象：小学５年生以上
参 加 費：100円（保険料）

［問い合わせ先］
博物館事務室　052-789-5767

ミクロの探検隊
～電子顕微鏡を使ってみよう～

11月10日（土）
場　　所：生命農学研究科附属農場
　　「農業館」
時　　間：10時00分～15時00分
対　　象：小学生及びその保護者の方で、
　　原則として午前、午後どちらも
　　出席できる家族
募集人員：20家族程度
入 場 料：無料

［問い合わせ先］
生命農学研究科附属農場　0561-37-0210

地域貢献特別支援事業
「都市近郊の農業教育公園・農業ふれあい教室：親子農業体験」

内　　容：親子で、土・作物・家畜と直接ふれあい、農業を体験・学習する機会とする。

11月10日（土）
場　　所：博物館野外観察園、
　　セミナーハウス
時　　間：10時00分～15時00分
定　　員：20名
対　　象：小学５年生以上
参 加 費：300円（保険料及び材料代）

［問い合わせ先］
博物館事務室　052-789-5767

地域貢献特別支援事業
「秋の野外実習～ドングリからさぐる古代の知恵・自然の知恵」

講　　師：新美倫子（博物館准教授）、西田佐知子（博物館助教）

名大トピックス No.172　平成19年９月18日発行
編集・発行／名古屋大学広報室
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。
名古屋市千種区不老町（〒464-8601）
TEL 052-789-2016　**FAX** 052-788-6272　**E-mail** kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
（http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/）でもご覧いただけます。

表紙

東北大学・名古屋大学
マンドリン春の合同演奏会
の様子
（ギター・マンドリンクラブ）
（平成19年４月29日）

ちょっと名大史

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY

65　G・C・アレン―日英のかけはしとなった外国人教師―

現在、名古屋大学には20ヵ国80人の外国人専任教員が在籍しています。国立大学に講師以上の外国籍教員を任用できるようになったのは1982（昭和57）年からですが、それ以前から契約等により「外国人教師」を雇用することは認められており、名大の場合、その歴史は前身諸学校にまでさかのぼります。前回登場した、愛知県公立病院のローレツはその草分けです。

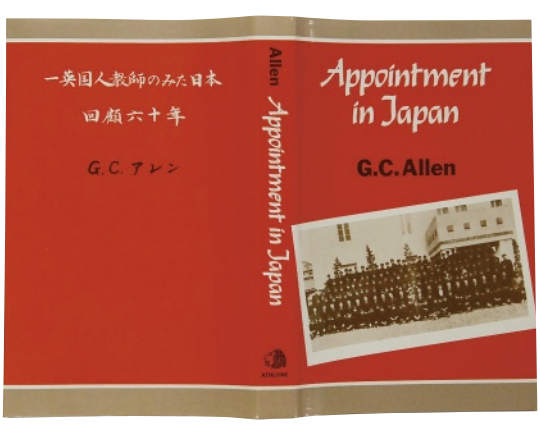
そのほか、名古屋高等商業学校（名高商）や第八高等学校にも、主に外国語を担当する外国人教師が多くいました。その１人が、名高商のイギリス人教師 G･C･アレン（George Cyril Allen、1900－1982）です。

アレンは、バーミンガム大学商学部を卒業し、大学院で修士号を得てすぐの1922（大正11）年、名高商に教師として赴任するため来日しました。商業学や商業史、英語を担当したアレンですが、学生に強い印象を残しながらも、わずか２年半で日本を去っています。しかし、アレンの日本との本当のかかわりは、ここからはじまったともいえます。

アレンは帰国後、リヴァプール大学教授などをへて、戦後はロンドン大学教授となりますが、主要研究テーマに英国ではほとんど研究されていなかった日本経済を選びました。その著書は17冊を数え、書名に「日本」を含むものが11冊もあり、３冊が邦訳されています。その多くが、日本の特性を理解し、その経済発展に寄与しようという好意的な視点から書かれたものです。また、第二次大戦終結直後にイギリス外務省経済産業企画室日本担当部長に就任した際には、極東委員会に日本への寛容な対応策を進言しつづけました。

こうした日本研究や日英友好に大きな功績を残したアレンに対し、日本政府から1961年に勲三等旭日中綬章が、また1980年には国際交流基金賞が贈られています。

アレンは1980年の受賞あいさつの中で、「私には二つの誕生日があります。一つはイギリスでの1900年に私が生まれた日、そしてもう一つは、日本での誕生日です。それは私が来日した大正11年のことです。」と述べています。



1 3
2

1　初めて来日した頃、22歳のアレン（『第参回卒業記念　名古屋高等商業学校』、1926年３月、大学文書資料室所蔵キタン会旧蔵資料）。

2　G･C･Allen 著『Appointment in Japan ― Memories of Sixty Years ―』（London，1983）。ブックカバー裏表紙の『一英国人教師のみた日本　回顧六十年』は邦題だが、内容は英文。アレンから見た名高商や名古屋の様子が生き生きと描かれているだけではなく、外国人による日本論としても高く評価されている。

3　1979年春に来日し、名大経済学部などを訪れた際のアレン（当時はロンドン大学名誉教授）。経済学部の図書室で撮影されたものと推定される（「アレン教授来名写真集」、大学文書資料室所蔵キタン会旧蔵資料）。

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡ください。